

# 琉球大学学術リポジトリ

大学と公立学校(津覇小)との連携を活かした教育実践  
研究－教師同士の学び合い、高め合う授業づくりを  
めざして－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2013-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉城, きみ子, 喜納, 裕子, 我如古, 綾乃, Tamaki, Kimiko, Kina, Hiroko, Ganeko, Ayano メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/27074">http://hdl.handle.net/20.500.12000/27074</a>

# 大学と公立学校（津覇小）との連携を活かした教育実践研究

—教師同士の学び合い、高め合う授業づくりをめざして—

玉城きみ子\* 喜納 裕子\*\* 我如古綾乃\*\*

## A Study of Developing Pupils' Peer Work in the Classroom Based on the Cooperative Work with Public School Teachers at Tsuha Elementary School

Kimiko TAMAKI\* Hiroko KINA\*\* Ayano GANEKO\*\*

### 1. はじめに

本学の教育学部では、地域の学校との共同研究、授業づくり等の学校支援が行われ、地域連携が推進されている。その代表的な取り組みに「アドバイザースタッフ派遣事業」があり、開始から今年で3年目になる。

#### (1) アドバイザースタッフ派遣事業とは

この事業の主な趣旨としては、下記の4つが掲げられている。

- ① 大学と地域社会が連携することで、大学の先見的な研究活動の成果を地域に還元する。
- ② 学校教育現場の様々な教育課題を把握・理解し、その解決に向けて地域の要請に応える。
- ③ この活動で得られた知見や情報をもとに更なる研究を進め、より質の高い教員養成の実現に生かす。
- ④ 教員の生涯を通じての資質・能力の向上に資するべく新たな研修のあり方を追求する。

これらの趣旨のもと、現在、60名のスタッフが公立学校の要請に応じて学校現場に出かけている。とりわけ、本学が包括連携を結ぶ中城村の「とよむネット」（中城村教育委員会）や教育学部が連携協定を結ぶNARAE ネット（那覇市立教育研究所）・はごろもネット（宜野湾市立教育研究所）・ずみネット（宮古島市立教育研究所）、そして石垣市教育委員会・竹富町教育委員会とは、附属教育実践総合センターの地域連携事業部門が窓口となり、それぞれが共同して地域の教育課題に取り組んでいるところである。

#### (2) 中城村教育委員会「とよむネット」との関わり

中城村教育委員会との「とよむネット」は、平成24年2月に連携協定を結び、本学部と村内の学校教育現場では様々な取り組みが積極的に行われている。例えば、中城村小中合同授業研究会では、大学教員が共同研究者として授業づくりから関わり、当日は多くの大学の教員や学

\* 琉球大学教育学部  
\*\* 中城村立津覇小学校

生が参加した。また、中城村教育委員会主催による、川嶋環先生の介入授業や授業研究会に学生と共に参加する機会を得た。この他にも、中城中学校3年生がキャリア教育の一環として本学を訪れ、施設の見学のみならず、大学教員の授業を受けている。また、教育委員会主催の研修会に本学教員が講師として出向くなど、教育委員会と大学が共に学ぶ機会を創出し、大学と学校教育現場の交流が進み、互いの関係性を強めている。その中であって、全国的な課題とされる学校教員の資質向上に係る当面の改善方策として、本研究では、校内研究会の活性化を目的とし、具体的には国語科授業のづくりとして、「教師同士が学び合い、高め合う授業づくりをめざして」、教員の一人ひとりの資質向上に向けての方策を探ることとした。

### (3) 中城村立津覇小学校との関わりについて

津覇小では、低学年、中学年、高学年の校内全体研究授業の教材研究段階から授業づくりまで、大学教員が年間を通して関わり、学校現場の教職員と共に学び合い、高め合う仲間の一人として共同研究は進められた。また、研究授業の際には、学校教員養成課程の学生も参加し、学校現場での体験の機会の充実等を目指したカリキュラムの可能性も追究した。学校教育現場の教職員から学ぶことはとても大きく、新鮮な情報や講義に活かせる取り組みをはじめ、貴重な資料等の提供も受けることができ、実際に学校教員養成カリキュラムの改善に活かすことができた<sup>1</sup>。

本稿では、津覇小の校内研究を通して、「教師同士が学び合い、高め合う授業づくりをめざして」で取り組んだ経験を、学校長、研究主任と共にテーマに沿って記述していきたい。

<sup>1</sup> 筆者個人としては、38年間の教職生活を通し、教員の授業力向上を大きな課題として取り組んできたが、「教師同士の学び合い、高め合う授業とは？」の課題を抱えたまま現在に至っている。大学に勤めるようになり、学校現場を外側から見る機会に恵まれ、特に津覇小の教師と関わり、「教師同士が学び合い・高め合う授業づくり」について、じっくり取り組むことができたことで、大学と学校教育現場との共同のあり方を再考する機会となった。

## 2. 大学との連携を図った校内研究の取り組みについて

大学が公立学校と校内研究で連携を始めるに当たっては、学校長の経営ビジョンの下、それに従って進めていくことが重要になる。また、学校経営ビジョンと校内研究体制づくりから琉球大学と関わることになった経緯について校長の考えを述べる。

### (1) 平成24年度の学校経営と校内研究のつながり

#### ① 学校長の学校経営ビジョンから

津覇小は、「生命や安全の確保、よさや可能性の最大伸長」の学校経営ビジョンの下、「常に学ぶ主体である児童の立場に視点を当てる」ことを基本にし、子ども一人一人の生命や安全の確保とよさや可能性を最大限に伸長することを期して、教育活動を展開している。

その具現化のために、「学校は組織体である」「教育の根本は授業力にある」を基本に、「授業改善」を学校経営の中核に据え、今年度の重点目標を「確かな学力の向上」「豊かな心、健やかな体の育成」「教職員の授業力・実践力の向上」を設定した。

そのために、全職員が一枚岩となって、連携・協働体制で組織的かつ機能的に職務遂行をし、学校力、教師力を高め、子ども達の「生きる力」の育成に努めることが重要であると考えている。

一方、教職員の専門性、人間性を磨く等の資質能力の向上のために、校長が教職員と共に学ぶ姿勢を持つことを大切にし、日々の授業や校内研究等での検証授業等で、具体的な授業観察や助言の観点を持って臨み、職員の実践を認め賞賛しつつ、時には、課題を明確にできるように努めるようにしている。

### (2) 校内研究体制づくりと琉球大学との関わりについて

校内研究体制づくりで重要なのは、「組織としての授業力の向上、授業力のある教師をいかに育てるか」である。そのために、授業力の重要な観点である「深い教材理解」「確かな指導法」に基づき「子どもの変容する姿」を目標に授業改

善に努めることが重要になる。そうすれば、教師の授業力が向上すると共に、子どもの学習の理解・定着が図られると考えるからである。

① 四者会：校長、教頭、教務、研究主任  
校長の教師の授業力向上への思いを伝える場

② 学力向上・校内研究推進委員会（校長、教頭、教務・研究主任、研究副主任、学年主任）  
校長の思いを教師の授業力をつけたい思いに変え、課題、課題解決のための共有化、研究推進についての共有化を図る場

③ 全体研究会、学年部会  
子どもの変容を図るための協働実践、工夫改善する場

④ 琉球大学との関わり  
本年は、教職員の授業力向上のため、中城村教委が提携している琉球大学（とよむネット）の担当教員の指導助言を仰ぐことにした。特に授業力の4つの観点（豊かな子ども理解、深い教材理解、確かな指導法、高まり合う学習集団）のうち、「深い教材理解」「確かな指導法」の具体的手だての指導を仰ぎ授業力向上に資することを期待した。

⑤ 授業力がある教師を育てる津覇小校内研修3段階

- ・ 確かめ合い（主に1学期）  
基礎研修（県外講師による師範授業・授業研究会、校種間連携研修）
- ・ 高め合い（2学期）  
検証授業（琉球大学教育学部教員による校内研における授業研究会、校種間連携授業）
- ・ 深め合い（3学期）  
発展研究（校内研教科以外の授業研究会）

⑥ 校内研修と関連する書く力をつける学習  
本校の琉球大学教育学部との連携による国語科を中心にした授業力の捉えや4つの視点については、本稿最後の添付資料を参照頂きたい。

### 3. 津覇小の日々の出来事から

(1) 教師が共に学び合い、高め合う授業づくりは「当たり前」の取組の中に  
津覇小と大学が共同研究するにあたり、教師の授業力の向上を第一に掲げながら、教師同士が共に学び合い、高め合う授業づくりを目指していきたく考えた。そのために、日々の授業実践の連続の上に校内研究授業を位置づけた。そして、結果として子どもたちが確実に変容していくことをめざした。このことは、誰でも知っている当たり前のことだが、当たり前のことがなかなかできないのが現状である。文科省や県、市町村の指定研究校をひき受ければ成果は確実に出るが、継続していくかという必ずしもそうでない場合がある。研究校の期間が過ぎると、その成果が色あせていくのは隠せない事実であり、どうにかしたいというあせりが出てくる。ただ、指定研究校でなくとも、「教師同士が当たり前互いに学び合い、高め合う関係性を築き、いくつかの要件が揃えば授業力は確実に向上するし、児童生徒の学力も向上する」そのことをどの教師も理解していると思う。

ところで、この一年間、津覇小に出向く回数が増えるにつれて、驚きにも似た「当たり前」の事実に出会っている。津覇小にとっては、日々の何気ない出来事だと思うが、その中にこそ「教師同士の大事な学び合い、高め合う関係性が生まれ、いくつかの学び合い、高め合う授業づくりの要件等が含まれている」ことを発見した。ここでは、まず津覇小と共同研究を進める中で感じたことを5つ紹介する。さらに、津覇小の実際の活動やアンケート・諸調査等の結果、児童の作品等を通して見えてきた「教師同士の関係性のあり方や授業づくりの要件」について記したい。

## (2) 外側から見た津覇小の事実

### ① 教師全員で学ぶ教材研究の仕方

まずひとつ目であるが、4月13日に第1回目の教材研究会が津覇小で行われた。第3学年の教師対象で、3～4名程度の参加者を想定していたが、そこには10名余の教師がおり、時間になるとどんどん増えて、結果として学校長をはじめ20名近くの参加者となった。当初、頭をつきあわせて4名程度で教材研究をするつもりだったので、資料も準備していなかったし、20名近い教師集団を前にして慌ててしまった。ちょっとした驚きであったが、そこに「学ぼう、学びたいという教師の真摯な姿勢」を目の当たりにした。若い教師だけでなくベテランの域に入った教師が多いのにも驚いた。ベテランの教師には、「わかりきったことでつまらないはずですよ」と前もって話したが、どの教師も最後まで熱心に参加して下さった。ノートや教科書で説明しよう思っていたことを黒板に切り替えた。まるで教材研究の模擬授業をしている雰囲気であった。取り上げた光村図書3年上の説明文教材「ありの行列」がこんなに素晴らしい教材であることを私自身も初めて知った教材研究会であった。なぜか、不思議なくらいとても充実した気分だった。その後も教師が教材に対峙し、各学年とも「この教材で子どもにどんな読みの力を付け、これをどのように書く力に繋げていくか」という地道な教材研究会が繰り返行われた。

#### 【教材研究会の様子】



### ② 教職員の要望に誠実に向き合う校長

二つ目の心に残っている出来事は、大学への正式な要請の前に学校長から毎回のように必ず電話が入ることである。それは、「すみません

ね。私のできることは職員からの要望を繋ぐことですので、申し訳ないのですがお願いできますか。」という内容であった。謙虚なお人柄と職員を思う熱心な気持ちがひしひしと伝わってくる。なぜか電話の向こうの校長先生の学校での様子が見えてくるような気がした。トップダウンで、職員に要求することよりも職員の要望や意欲等に誠実に向き合って対応することに重きを置かれていることが予想されたが、実際に学校を訪問してみると、その予想は見事的中していた。

### ③ 研究主任のリーダーシップの取り方

三つ目であるが、研究主任のリーダーシップの取り方である。毎回の研究の概要を丁寧に記録し、成果と課題を明確にした研究通信を継続して出しているのである。(詳しくは、後ほど活動の実際で紹介していきたい。)学年の教材研究会にも毎回参加し、その時の研究の内容や様子を記録することに余念がない。常に学年の先生方を引き立てる役目に徹しておられる。授業研究会においても決して出しゃばることなく、その時の授業学年や他学年の教師が全面に出ている。しかし大事な所では、ご自分の考えをしっかりと述べておられる。教師集団をぐいぐい引っ張るといよりは、授業研究会を有意義なものにするための環境づくりに心配りをし、その時、その場のリーダーの役目を独り占めせず、各学年にバトンを渡している。校長、教頭、研究主任とも要所で発言し、それ以外は、職員を温かく見守り育てる立場に徹していることが手にとるように分かる。リーダーが控えめに振る舞っている側で、他の先生方の活発な話し合いが続いている。

### ④ 学校が開かれるは教職員の心が開かれること

四つ目であるが、外部の者が度々学校へ足を運んでいると、少し気後れをすることがある。しかし、毎回のように変わらぬ笑顔で教職員や子どもたちが対応して下さるのである。それは、とても嬉しいことで「今回もまた、一緒に学べ

る」という気分になる。学校が開かれるということは、教職員の心が開かれていることを言うんだなということを実感するひとときでもある。同時に素直な気持ちで学びたい、向上したいという教職員の思いが一人一人の表情から伝わってくる。毎回出される課題が、一般的なものから具体的なものになり、やがて専門的なものまで及び、いずれも日々の実践の中から出て来た課題であり、講師として扱われている筆者も必死な思いで勉強しないと追いついていけない。津覇小の教職員と夢中で関わっているうちにいつのまにか津覇小の教職員になりきっているのである。不思議な現象が度々起こったのである。

#### ⑤ 授業研究会での同僚の見事な発言

五つ目は、授業研究会での教師同士の話し合いの様子である。授業者にベテランの域に達した教師が多い。学年の教師間の連携が良くとれていて、いつも良い授業をして下さる。しかし、ベテランと言えども課題のない授業はない。教師同士の授業参観の視点が子どもの実態に向っ

ているので、授業者が誰であろうと校内研究のテーマに基づいて、子どもに書く力がついたのかどうかを基に厳しい発言も度々でてくる。指導助言者は、授業者に気遣いながらどのように指導助言していけばよいかと迷う時がある。

しかし、同僚は、分かりやすく、そのことについてずばりと指摘してくる。授業者へのご苦労様の気持ちを兼ねながら次時の授業をきちんと見据えている。同僚だからこそ気兼ねなく言える見事な発言である。何でも言い合える雰囲気なので授業を批評する力もかなり高く、授業研究会が活性化しいつも有意義である。終えた後の爽快感は何とも言えない。いつも笑いの絶えない授業研究会でもある。いったいこれは何だろう。不思議な気分になるひとときである。

以上の五つの事実は、学校の外側から客観的に見て筆者が感じたことである。おそらく他の人も同じように感じるのだと思う。この中の何がお互いの関係性を強め「学び合い、高め合う授業づくりのための大事な要件」となっているのかを検証していきたい。

## 4. 津覇小研究活動の実際

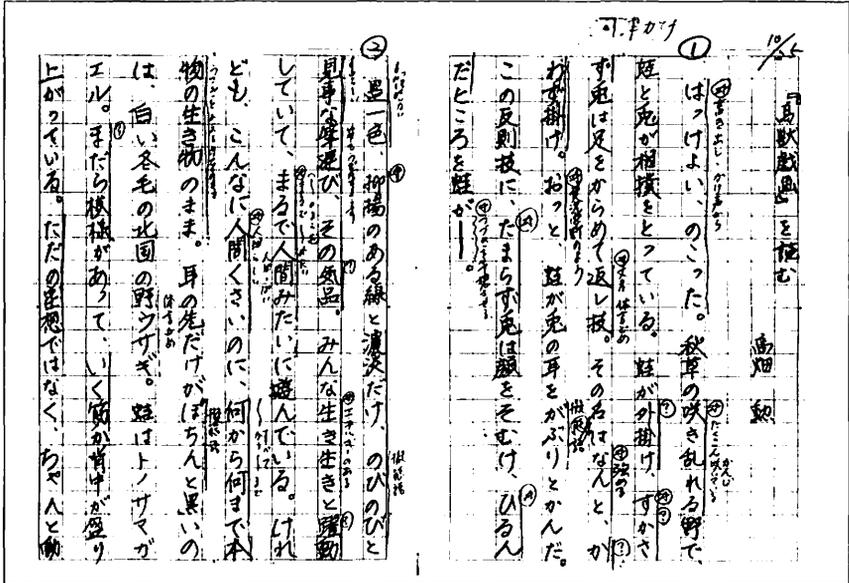
### (1) 児童の論理的に書く力を高めるための授業 改善に向けた取組

#### ① 書くことにつなげる読みの教材研究

津覇小では、児童主体の授業づくりをめざして、まず、教師自身が教材文を視写し、書き込みを行っている。子どもが一人学びで行うことを教師がまず実践している。そうすることで筆者の息づかいを感じ、この教材で培うことができる力は何かを明らかにしているのである。書く活動につなげる読みだからこそ読み取りをしっかりと行い、書く活動につなげていきたいという教師の願いがある。また、子どもが躓きやすい所や疑問・課題が出そうなところに前もってチェックを入れ、書き込みをしている。キーワードとなる言葉等には、発問を書き込みし、学級の何名かの児童の反応まで予測している。

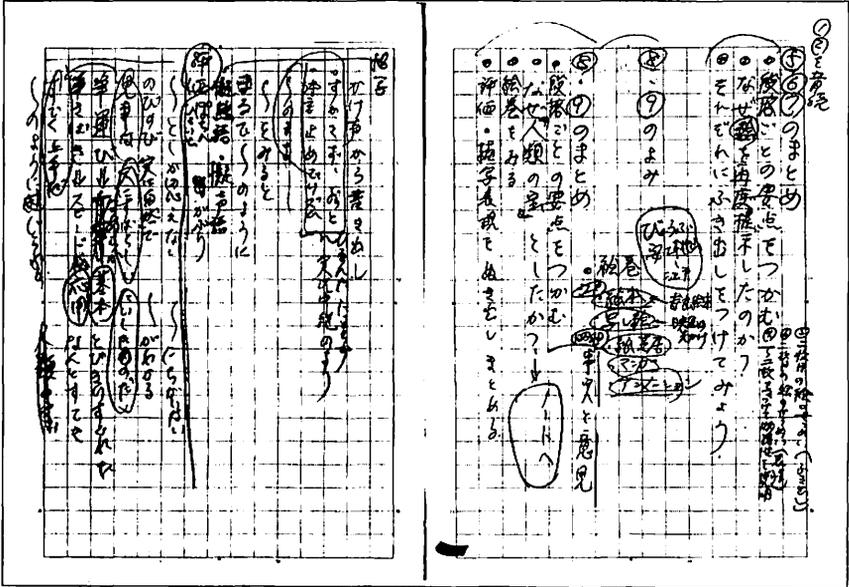
さらに、作者の物の見方や考え方、文章構成、表現の工夫等を教師自身の力でまず明らかにしている。これは、書く活動につなげていくための教師の基礎作業でもある。この作業をくぐり抜けることで、児童の実態に応じた表現の型が見えてくるのである。(後ほど表現の型を基にして教師自身が開発したワークシートを紹介したい。) これまで、最初に手にしてきた指導書や赤本は、教材研究の最後に目を通す。あくまでも参考にする程度である。指導書や赤本に頼らず、悪戦苦闘しながらも教師自身の力で目の前の子どもたちにどのような指導をしていくかを生み出す喜びを感じることが授業力を伸ばす近道だと捉えている。次ページのノートは、教師自身が6年の教材「鳥獣戯画を読む」を視写し、それに書き込みをした一部分である。このような作業を多くの教師が行っている。誰かに「やらされている」のではなく主体的に行っている。

【教師の視写と書き込み】



教材研究はここで終りではなく、書き込みを基にどう指導していくかなど、いろいろとノートにメモしている。指導案づくりまでは、このようなアナログ的な作業が続いていくのである。

【教材研究ノート】



指導案を作成し、授業をしながらも教師の教材解釈はまだまだ続いている。このような教材研究の仕方から重要なことが見えてくる。まず、目の前の子どもたちに対して「こう育て欲しい」「こんなことが出来る子になって欲しい」という教師の願いが明確に見えてくる。この願いを教師集団で共有しているからこそ、教材研究会に自主的に大勢の教師が参加するのである。また、教師自らが自分の課題と真摯に向き合っている。

## ② 教師の授業反省から

津覇小では、教師自身の授業反省を週案に丁寧に記録している。その記録を見ると教師の変化がはっきりと浮かび上がってくる。

### 【津覇小学校平成24年度週案より抜粋】

校内研の授業まで一週間前であるが、きみ子先生を招いて授業参観をしてもらった。「読み」から「書く」への研究なので、助言してもらうには「読み」の部分をもっと研究すべきではと考えた。私自身読みを深める方法を手探りで行っていたため、あまり深めることのできない授業になってしまったが、助言を頂いたお陰で次の課題が見つかった。次時より当日の本時まで助言をいかしてさらに読み深められる授業をめざしたい。(以下省略)



「鳥獣戯画を読む」の内容に入ったが、授業をしながらつくづく読み深めることの難しさを改めて知った。おさえるべき所に時間をかけることや子どもの意見を大切にすることなど。慣れずに時間がかかりすぎた点もあるが、進めるうちに何かが少しずつ見えてきた気がする。

子どもの読みを進めていく中で私自身の読みも深めることが出来、国語学習の楽しさを感じている自分を発見した。自分史上凄いことだ!!



授業後、色々考えた。子どもの思考によりそうことが一番だと結論に達した。色々言われたが… ((^\_^)) 夏休みからの6学年の成長と授業の成長を思うと大満足の内容であったと自負している。しかし、課題はつきないので次回の授業でどう組み立てていくかが重要だと思う。最後までしっかりやっていきたい。



国語の校内研究のまとめに入る。授業参観日を利用して作文鑑賞会を親も一緒に行った。大人も「高度だ」「難しいね」とびっくりしていた。友達の記事を評価する。評価を受け、次に生かすことは、良い経験だし文章力をつけるのに良い方法だと思う。

このように、教師は自分自身の授業を常に振り返りながら、一時間一時間の授業に命をかけ子どもの成長につなげているのである。何よりも教師自身が国語の授業づくりの楽しさを発見している。「自分史上凄いことだ!!」この喜びは、子ども達に「読み深める」ことが、しっかり伝わったがゆえの感動であろう。教師も子どもと共に成長し、子どもの思考に寄り添うことの大切さや常に課題に向かって進んでいく意気込みを教師自身の言葉で述べているのである。

自らの実践を通して授業づくりの変容を自ら感じ取っている。つまり、授業の楽しさ、面白さ、魅力に気づき、手応えを感じているのである。また、このような教師の成長の足跡をしっかり認め、全職員で喜びを共有する場を校長先生は設定している。

## ③ 文章構成、筆者の表現の仕方を生かし「書く活動に繋げる表現の型」

これまで述べてきたように、津覇小では教師一人一人が子どもの実態を踏まえその問題点を共有している。そして、教師自身の課題を見据えて教材研究に取り組んでいる。音読・視写・書き込みを通して「教材文の文章構成や作者の表現の特徴」「この教材の何を書く活動に転移させていけば良いか」等を明らかにしている。すると、津覇小の校内研究のテーマである「表現の型」が見えてくるのである。





一、あゝ速すぎだ。てびり、ギョイわわわわわ  
 いる広場、丸がふとふり返ると、丸と蛙が足  
 が速いと評判、丸を追いかけている。一体何  
 が速きたの、いふう足速の速いのは、まるで  
 風のように走、て、速くにいる丸と蛙に、も  
 と速くるといふ、ていふ、奥には、気持  
 ちよやくうに蛙が笑いながらわらわらするが、てい  
 る。二匹の丸は、ちよやくうとみるねがしたくて  
 蛙のようにあおむけになる。てい。

この絵は、星のひで福れた絵。墨でつくら  
 れたのに、アニメのようにや、動感があ、て  
 来しい。動物は、すおすおまで細かく仕上げ  
 ているのに、とこか人風、いといとこるがあ、  
 ておもしろい。また、葉、ほも一枚一枚丁寧  
 に描かれていて、肌につられてる感じがする。  
 笑は、この構図は、瞬間を捉えて、不  
 つり絵巻の進み方は、右から左へと流れてい  
 ているが、この場面は、逆に流れている。  
 ぞろ、さ？この場面は、読者は、興味を持って  
 ほしいからにらがない。

津朝小の独自のワークシートを基に3年生、5年生、6年生の子どもの作品を見てきたが、教師の工夫した所にきちんと目を向け、自分の作文に生かしている。このワークシートは、説明文の読みの教材研究の段階を経て書く活動に繋げる際に教師が改善を重ねながら生み出したものである。教材観と児童観が結びついている。このような日々の実践の中で、教師は子どもの確実な変容に気付き、実践に手応えを感じている。そこで、全教師で有効な手立てを出しあっている。

⑤ 教師の〈手だてのキーワード〉から児童の〈変容のキーワード〉へ

下記の表は、教師が教材研究段階から授業づくりにおいて行った手立てを出し合い、子どもがどのように変容していったかを、キーワードでまとめて示したものである。

<p>〈手だてのキーワード〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎初発の感想</li> <li>◎説明文の型の学習</li> <li>◎写真と文章が合うように指導</li> <li>◎書き込み（分からない言葉、表現）</li> <li>◎指導事項 （キーワード、接続語、文末表現）</li> <li>◎指導事項の常時掲示（順序を表す言葉、注意の文、することの文、数や大きさを示す文）</li> <li>◎学年での教材研究</li> <li>◎表現の型（文章構成のワークシート）</li> <li>◎視写</li> </ul>	<p>〈変容のキーワード〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎学習に対する意欲</li> <li>◎読み取りがスムーズにできた</li> <li>◎文章を詳しく読めた</li> <li>◎読みが深まった</li> <li>◎キーワード、接続語、文末表現に気を付けて読むことができた</li> <li>◎言葉の意味の微妙な違いに敏感になった</li> <li>◎作者に対する興味、尊敬の念が高まった</li> <li>◎文章構成が分かった</li> <li>◎抵抗なく書けた</li> <li>◎意欲的に書けた</li> <li>◎書くことに自信がもてた</li> </ul>
--	--

このように子どもの変容に手応えを感じた教師集団は、「どんな手立てが子どもに力をつけ、子どもを変容させる原動力になったのか」を各自が出し合うことで、それを共有し確認し合っている。そして、ここで満足することなく果たしてどの程度、一人一人の子が書く力を伸ばすことができたのかを検証していく取組が始まったのである。つまり一人一人の子の個人内評価を行うことを試みている。子どもたちの作文の一学期と二学期を比較した時に、どのように書く力が伸びてきたかを検証したのである。個人内評価を行うことで子ども一人一人の課題に、もう一度向き合うことになった。そして、それが次の手立てを生み出すきっかけになった。

有効な手立てを共有すると、自然に次の課題が明らかになり、全校的な取組はだんだんと増えていく。「表現の型」にはじまり「作文カルタ」「作文ワーク」「相互評価シート」「振り返り」などが行われている。これは、教師同士で話し合いをしながら教育活動のレベルをあげていったのである。子どもの可能性の大きさにますます意欲が高まり、次の取組が始まるという素晴らしい相乗効果が出てきたのである。

誰かに「こうなさい」と強制されたわけではなく、教師同士が互いに知恵を出し合って生み出したのである。このような取組だからこそ、全てスムーズに行われていくのである。ここに教師の主体性、自律性の持つ大きさを実感した。ここで五年生の一人の子の作文（4月と10月）を紹介し比較してみることにする。

⑥ 児童の作品から変容を覗る（5年児童の 作文 上：一学期 下：2学期）

ここでは、児童の書いた作文から、具体的な変容を確認してみたい。

【4月】

入学を祝う会

今日、3時間目の前のやすみ時間に体育館に、2年生から5年生まで来ていました。でも6年生は1年生をおんぶして来たから、6年生はおそくていきました。

そしてみんなかならずでからすぐ5年生がきました。わたしはと、でもきんちううしました。

なぜかというところ1年生にいとこかいるからです。わたしは一番前なのでわかりやすいところについてわたしは一番きんちううしました。そしておめでとう2年生がきました。そして2年生の男の子がうけました。そして3年生がおめでとう4年生がきました。そして4年生の女の子がきました。そして5年生の女の子がきました。そしてわたしは祝う会をしました。わたしは祝う会をしました。わたしは祝う会をしました。

【10月】

わたしは、日本の社会は、これまでとくらしくなると思います。なぜなら日本は自給率が低くて、食料のほとんどは外国より少ないのです。

下のグラフは、おもな国の穀物の自給率を示したものです。

日本とフランスは40%以上差があります。日本とフランスは7倍以上あることが分かりました。フランスは2007年で169%なのは、日本は2007年で25%しかありません。

ほかの国とはちがって、自給率が少ないのです。自給率が減ると日本の食料が減っていきまます。

このように、日本はほかの国とくらべて穀物自給率が低いのです。だからいつ食料がなくなってもおかしくありません。日本の社会はくらしくいと思います。

著者名 大谷 拓照

題名 おもな国の穀物の自給率

出版社 文けい堂

発行年 二〇一二年

国	自給率 (%)
日本	25
アメリカ合衆国	160
ドイツ	109
フランス	164



津覇小では、全校児童が友達同士で相互評価したり、担任以外の先生方にも自分の作品を観て頂いたりと自分を振り返る機会や取組が日常的に行われている。

子ども達は、自分の書いたことを振り返ることで、より良いものをめざす習慣が身についている。また、自分の書いた事に対し責任を持つことにも気づきはじめています。

#### ⑨ 教師の指導と評価の一体化

津覇小においては、教師も子どもも自分の学んだことに対して、常に振り返りを行う事が当たり前になっている。そして、それを全員で共有することも当然のことである。ここで、教師が指導と評価の一体化としてどのような工夫をしてきたかを記していきたい。

教師は、読みとったことを書くことへつなげるため、観点表を活用して作文を評価している。教師の観点表は、子どもの相互評価の観点と一致している。予め評価規準を設け指導の視点にし、教師の指導したい観点を子ども同士の相互評価の視点に繋げたのである。そうすることにより教師も子どもも同じ視点で作文を評価し、課題となる所の共通点を見出し、評価したことを次時の授業に活かす工夫をしたのである。

なお、作文の評価の観点は、学習指導要領の観点(3)の①の書くことの指導事項をもとに再構成したものである。

### (2) 校内研究をバックアップしてきたもの

#### ① 「校内研究通信」でステップアップ

研究主任が毎回出している「校内研究通信」には、「子どもを変えるために行う校内研修」をキーワードとして、児童の実態(課題)が明確に記載されている。また、教材研究会や校内授業研究会の成果と課題がきめ細かに記されているのである。それを毎回、教師全体で共有するのである。教師自らが振り返る場であると同時に次の授業へつなげるサイクルが機能しているのである。これこそが、校内研究を一步一步、前へ進める大きな役目を果たしてきたもののひとつだと捉える。研究主任のねらいをまとめると以下ようになる。

〈校内研究通信のねらい：校内研通信を通して学びを最大限にする〉

教材研究をすることによって、それぞれの学年は研究した教材について多くを学ぶ。今年度は琉球大学と連携して教材研究や授業研究を行っているので、より多くのことを学ぶことができた。他の学年は、その学年が研究したことを、学習指導案や授業参観を通して学ぶことになる。授業を参観するだけでも、多くの学びがある。

しかしながら、全学年の授業を参観できるわけではない。教師全員参加の研究授業は、授業時数の欠時を作らなければならないため、多くは実施できない。せいぜい、低学年、中学年、高学年のそれぞれ一回実施するのが関の山である。それ以外の学年は、隣学年だけでの授業研究会となる。

せっかく研究し授業を公開しているにもかかわらず、授業を参観できない現状がある。

そこで、校内研通信を発行し、通信を通して、他の学年がどの教材でどのような研究をしているのか、授業研究会ではどのような話し合いがなされて、授業者や参観者が何を学び取ったのかについて共有できればと考えた。校内研通信に以下の2つの役割を期待し発行することにした。

#### ア 取組の確認、情報提供

まず、大きな役割として、校内研究について何をどのような方法で研究するのか、研究テーマや方法等を教師全員に浸透させるということである。そして、日程の確認や校内研究テーマに関連する情報の提供を行い、校内研究が円滑に進められるようにすることである。

## イ 学んだことの共有化・振り返り

上述の役割は、校内研究を円滑に進めるためにはとても重要である。今年度はそれに加えて、校内研究の中身、つまり校内研究を通しての学びを最大限にしたいと考えた。そのためには、各学年での学びを他の学年ともできるだけ多く共有する必要がある。そこで、校内研通信を通して多くの学びを共有したいと考えた。できるだけ多くの学びを拾い上げるために、各学年の教材研究会において、琉球大学の教員がかかわり指導して下さるときは参加させてもらい、そこでの話をメモしていった。そのメモを校内研通信で公開していく。その学年の教師は、自分のメモと校内研通信で振り返ることができる。また、他学年の教師は、校内研通信を通して、他学年がどのような取組をして、何を学んだのかが分かる。他学年での学びを「知る」だけでなく、自分の学年の授業研究にも生かせるようにできればと考えた。他学年の学びを自分の学びにして自分自身の実践に生かしていくことが、学びを最大限にするということだと考えている。

また、授業研究会での振り返りも大事にした。本校の授業研究会は、ワークショップ形式を取っており、授業参観後に学年で授業について話し合うことにしている。授業参観の視点として、「授業仮説の検証」「子どもの姿（変容）」「教師の手だて」の三つを設けた。その三つの視点で話し合ったことを記録してもらい、その後の全体場で、全員に伝えたいことを取り上げて話してもらう。しかしながら、授業研究会は時間が限られている。その場で話されることは、各々の教師が学んだことのごく一部である。

そこで、ワークショップで話し合われたことをできる限り伝えるために、ワークショップでの記録も校内研通信に載せることにした。なお、校内研究通信は、20号まで出しているが、その一部を「本稿最後に添付されている②添付資料」で参照頂きたい。

＜授業参観の視点と具体例＞

参観の視点	具体例（全体協議で伝えたい内容を絞って取り上げる）
①授業仮説の検証	◎つたい力が、手だてによって子どもの学び(変容)につながったか ◎評価との関連（目標の達成状況）
②子どもの姿(変容)	◎子どもの取組、思考過程 ◎子どものつぶやきや表情 ◎授業者の投げかけに対する子どもの反応 ◎学習意欲 など
③教師の手だて	計画 ◎研究主題との関連 （表現の型を通して表現力を高める指導計画となっているかどうか） ◎指導目標、教材解釈、指導計画、指導案
	本時の指導 ◎子どもの反応に対する教師の対応（つなぎ、見取り） ◎学び合う活動への手だて ◎発問、説明、指示等 ○板書 ○ノート、ワークシートの活用 ○学習規律に関する指導 など
	環境 ○場の設定（座席、教員の配置など）○掲示物の活用 ○教材・教員・資料の使い方 など

左記の表は、授業参観の視点と具体例を示したものである。

これを基にワークショップで学年の話し合いを行う。学年で話し合われたことは、全体の授業研究会で学年の代表者が発表を行う。学年の代表者だけでなく、多くの教師が自ら気付いたことや感想についても自由の述べる場も用意されている。

## (2) 教師の姿勢や反省記録にみる授業研究の充実

これまでの授業研究は、年に一度の公開授業に向けての短期集中型の取組であった。

今年度は、一年間を通した、学び合う充実した授業研究ができたように思う。その理由のひとつに、年度当初に琉球大学と連携して、児童の実態に応じた教材分析のしかたや児童主体の授業づくりなどを学ぶことで、教師の研究に対する意欲、子どもの力をつける実践をしたいという授業づくりへの向上心などが高まってきたことがある。

それは、他学年の教材研究会に参加する教師、全体授業を行わない学年の教材研究会で琉球大学教員から指導を仰ぐ教師、週案に校内研究に関わる反省を書き込む教師などの姿に見てとれる。参加することや書かせることを強制したのではない。教師自らが自発的に研究に取り組んでいるのである。

また、校内研通信を発行することで、他学年の学びが共有され、その学びを自分の実践に生かしている様子があった。例として一人の教諭の週案について取り上げる。直接、琉球大学教員との教材研究をしていない学年もあったのだが、その学年の教師の週案から、授業研究を通して学んだことと琉球大学教員からの助言をいかした指導についての記入が見られたのである。

今年度の授業研究を通して、本校の教師が、互いに何でも話せる雰囲気の中で互いの課題を共有し、他学年からも学ぼうとする学び合う教師集団に育ってきたことを実感している。本校の教師は、もともと学び合う教師集団ではあるが、琉球大学と連携して授業研究を行うことで、学び合いがより深まってきた。そのような教師集団だからこそ、より充実した授業研究となり、教師一人一人も育っているのだと考える。加えていえば、琉球大学との連携で得た学びをより広げたいと考え、学び合いを意識して行った授業研究会や、他学年の情報を発信した校内研通信の発行も、充実した授業研究、学び合う教師集団づくりへの支えになったのではないかと考えている。

① 週案の日々の記録から

授業等の反省・備考	<p>今週は、校内研(隣学年研)も大詰めで、運動会の延期と変わり、あとという間ねすぎた。10月が授業を打つということ。今回、同学年(1組 4組)の授業を見せてもらい、大変勉強になった。それぞれの学校のカー、工夫、良さがあり、お互いに取りあわ</p>
	<p>いきたい。1年4クラスと仲村先生も交じり、共に教材研究できたことは、本者によからず、運動会の取り組みも、うまく連携協力し、割とスムーズにできたと思う。つづいて先生もそれぞれも、分校までよく足を運んでくれて何かという配慮して下さった。校内研も運動会も、校の授業研究のペースも思いをたがして、10/9</p>

(上記は1年K教諭の週案からチームで学び合う姿が見られる。)

授業等の反省・備考	<p>&lt;十週目&gt;          ○ 研究授業に向けて学年で毎日、今日の授業の振り返りをし反省点においては繰り返直し、次時の授業の打ち合わせを行いながら、指導案の検討をしてきた。          授業づくりについては、きみ子先生から助言をいただき、言語活動に広がりが見られるよう発問を意識して展開していった。(※視点をしっかり持っていると言問もぶれないとのこと)          研究授業を引き受けたさのみ先生の熱意と三学年が一つにまとまり研究を進めることができたことで児童に響く力が育ってきている。課題はまだあるが成果もみられた価値ある校内研であった。</p>
-----------	--

国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで取り組んできた校内研で学んだことを生かして「食べ物はおかせになろう」の単元では文章構成を意識したワークシートを作成し、そのワークシートに書きせることで児童の頭が整理されスムーズに書き進めることができた。日記の中に構成やよい表現を意識して書ける子が出てきた。</li> <li>・到達度学力調査に向けての取り組みを通して、確実に文章を読む力・読み取る力がついてきていることが手に取るように分かる。A・B問題からから見えてきた課題(別紙)については、意識して学習の中で取り組んでいきたい。</li> <li>・音読や新出漢字、国語辞典を使っでの意味調べを継続強化する。</li> </ul>
----	---

(3年Z教諭の週案。研究授業で学んだことを他の単元に生かしている姿が見られる。)

国語	<p>2学期は、授業の初めに音読を行って授業を進めた。漢字の定着には差があるが、細かい止めはおも注意できる児童が増えた。仕切りフレット作りでは、前教材の写真アップとルーズで説明するという「表現の型」を利用して写真の説明を書かせた。かなり時間がかかった理由として、主語・述語をはっきりさせた短文を書けなかったり、短い文を膨らませることができなかったりしたために書き直しをさせたことの2つが主に挙げられると思う。今後文章を書くことを授業や宿題で多く取り入れること、それから4年生らしい本を多く読むことの継続した指導が必要と考える。</p>
----	---

(上記は4年N教諭の週案。児童の実態をもとにした授業計画のもとで授業を進め、関連指導の必要性に気づいている姿が見られる。)

授業等の反省・備考  
 ・校内研を通して、国語で教科書にまどく。キーワード、文章とより意識するようになっていふ。学年の系統性なども考えると、今、つけなければならぬ力、学年の責任など、感じ、国語の指導にも、新たなおもしろさを感じていふ。今年度、学年で先頃の授業研の記録

の確かめ、ふり返りをしながら、感想と交流したりして、また、勉強になったと思う。

〈1年K教諭の週案。琉球大学教員の助言を生かして授業を進めている様子が見られる。〉

このような日々の授業の振り返りこそが、自分自身の授業にしっかり向き合うことになる。そして、視点が子どもに力を付けるためにどう指導していくかということに向いていて、これこそ「指導と評価の一体化」へ向けての記録といえる。授業力の向上へ向けて日々進んでいることが手にとるように分かる。

## 5. 活動の結果

### (1) 児童の書く事への意識と教師の授業改善にみる活動の結果

#### ① 児童による国語アンケートの結果

回 答	3年	4年	5年	6年
● 説明文の授業は楽しかった・まあまあ楽しかった	89%	92%	93%	85%
● 文章を書くことが好きになった・まあまあ好きになった	84%	80%	83%	68%
● 文章の書き方が分かるようになった・まあまあ分かるようになった	92%	80%	87%	90%

#### ② 教師による授業力診断シートの結果 (回答率 ○：以前から意識できている、 ◎：意識できるようになった)

授業力4つの視点	○回答率	◎回答率
1 豊かな子ども理解	53%	47%
2 深い教材理解	32%	64%
3 確かな指導法	38%	57%
4 高まり合う学習集団づくり	47%	53%

① 児童による国語アンケートと②教師による授業力診断シートの結果を踏まえ、津覇小の教師は、次のように考察している。それを紹介したい。

【考察】①より、多くの児童が、「説明文授業が楽しかった」「書くことが好きになった」と、書くことへの意欲を高め、「文章の書き方が分かるようになった」と実感していることが伺える。これらの結果と授業後における教師の書く力の高い評価とを関連させると、児童自身の実感が伴った書く力の高まりにつながったと捉えることができる。また②より、教師の授業力4つの視点のうち、特に「深い教材理解」「確かな指導法」への意識が向上している。教師が今年度、琉球大学との連携によって学んだ、児童の実態に応じた教材分析（深い教材理解）、児童主体の授業づくりや書く力を高める指導（確かな指導法）などの授業改善が、児童の書く意欲、書く力を高めることにつながったと考えられる。

### (2) 各学年における書く力の変容の記述式のアンケート

教師は、各学年における書く力の変容について記述式のアンケートで多くのことを述べている。

- 教材の読み取りをしっかりと行ったので、自分で説明文を書く時も教科書を見ながら自分の言葉をあてはめて書くことができていた。
- 「重要語句」「使いたい語句」「文末表現」等を掲示することにより文章を書く時や日記の中で使おうと意識していた。
- 児童の思いをもとにした学習を進めることでより理解が深まった。

文章構成を意識したワークシートを準備し、それに書くことで児童の頭の中が整理されスムーズに書き進めることができた

- 文型や表現の型を意識して指導したので着実に力がついている。
  - 体験活動や他教科との関連で書く活動が広がってきた。
  - お互いの作品を読み合い、友達に評価してもらうことで自信に繋がりが意欲的になってきた。
- 以上、7点を紹介したが、教師が実感したことは、教師自身がこれまでの実践で力を入れてきたことであり、それが結果として子どもたちに表われてきたのである。
- このことは、諸調査においても同様な結果となっている。

### (3) 諸調査にみる活動の結果

#### ① 説明文単元における作文評価「概ね書けている」の通過率

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
構成	100%	94%	88%	87%	89%	92%
記述	82%	92%	92%	83%	98%	82%
観点	構成	低学年：事柄の順序に沿って書けているか 中学年：段落のまとまりを考えて書けているか 高学年：文章全体の構成を考えて書けているか				
	記述	低学年：つながりのある文章が書けているか 中学年：目的に応じた事例を挙げて書けているか 高学年：文章表現やグラフ・表を引用して自分の考えが書けているか				

左記の作文評価では、全学年においても作文への高い評価がみられる。このことから教師が互いに学び合いながら授業研究を重ねることで、「論理的に思考し書く力を高めるための授業改善」の成果が明確に表われたと捉えられる。

また、日常的に書く活動を実践してきた結果も、子どもの書く力に大きな影響を与えたと思う。

### (4) 大学との連携による感想（記述式）

アンケートや諸調査の中には、「授業力」自己診断テスト（自由記述）で、大学との連携について、津覇小の教師が率直に感じたことを記している。教師の記述のままを紹介したい。

- 教材研究のしかたを学ぶことができた。
- 指導書を見ないで自分の力で教材研究をすること、それから子どもたちの感想から課題を設定することなどを学びました。
- 教材研究を行う際には、指導書を見ずに、まずは自分なりの計画を立てることで、教師自身の思考を固めてしまわないようにすること。
- 指導書に頼るのではなく、子どもの実態に応じた授業づくりをいつも考えて、独自で、子どもの喜ぶ授業を行っていく姿勢でやってきたが、改めて、そのことを確信し、嬉しくなりました。やはり、我慢して（させて）授業を受けさせるのではなく、眼を輝かせる楽しい授業を組み立てていきたいと思えます。
- まず教師が教材を読み分析することが大切だということを再認識した。
- 「子どもにどんな力をつけさせたいか」考えて、教材研究を進めることを心がけたいと思う。
- 学年で教材研究を深めたことが、児童の「書く」の意識につながったと思う。
- 子どもにさせる作業を予め教師自身がやってみる、その上で見通しをもち授業に臨むということ、大変納得のいくことで、そのように心がけている
- 「子どもにさせることは、教師自身もやってみる」というきみ子先生から学んだ教材研究をもとに、書き込み等やってみて気づいたところ（子どもが躓きそうなところ、迷うだろうところ、

発問したいこと、確認すべきところ等)を意識して、授業を進めることで、学習の定着が図られ、分かりやすい授業になっていくと感じた。

- 子ども自身が学ぶ目的が持てるように、教師がどう発問するかを考えるようになった。初発の感想から疑問を持たせて子ども自身で答えを導きさせる流れをつくることで、学習に対する意欲が見られるようになった。
- きみ子先生の指導助言の「発問の工夫」は大変参考になった。
- なんとなくやってきた初発の感想の重要性を知り、それを意識して単元全体を進めるようにした。「教えたいものを学びたいものへ」というレベルには至っていないが、やらされている学習から児童の意欲的な学習へ変化してきたことを実感している。
- 児童の知りたいこと、やってみたいことなどをもとに学習のめあてを立てること。
- 板書の工夫、ノートとの連動を考えることで、子どもがノートをまとめることにも慣れ、授業の流れが見えるようになっている。
- 説明文を書くというゴールを児童に知らせたことにより、教師も見通しがもてた。
- 読みの学習では、考える場面にペア学習を多く取り入れるようにすると、一人では見つけられない考えを出してくれた。学び合いをこれからも研究したい。
- 言語力をつける基礎的な三点セットで、「1音読」「2視写」「3書き込み」を教えてもらい、早速取り組んでみた。視写をするとき、説明文で順序を表す言葉等に気をつけて書くようにした。児童の中には、日記にも、視写(写本)が楽しかったと書いている児童がいた。また、7ページほど視写をして自信を持って授業に臨む児童が増えてきた。
- 一人学びを通して、自分で学習を進める力が必要であるということ。

津覇小の教師の記述式の感想を見ながら感じたことは、どんなにベテランの域に入っても他人から素直に学ぼうとする先輩教師の姿は、若い教師に図り知れない大きな影響力をもたらすことを実感した。それが、学校の学ぶ雰囲気を作りだしている事のひとつでもあることを学んだ。

また、教師は「常に学び続けなければならない」と言う言葉があるが、互いに学び合う仲間の中でより大きな効果を生み出すことも分かった。そして、それが結果として子どもに表われている。

さらに、どの教師も「授業力向上」を目指していることは当然であるが、教材研究の仕方等を獲得すれば指導書等に頼りつきりにならず、自らの力で目の前の児童の実態に即した授業がどんどん展開されていく事実を目の当たりにすることができた。

なお、筆者が「津覇小に向いてどのような学び合いをしたか」の概要については、本稿最後の「添付資料③」を参照頂きたい。

## 6. 津覇小の校内研究の成果と課題から

### (1) 成果

- ① 琉球大学と連携して授業改善を行うことにより、深い教材理解、確かな指導法などの、教師の授業力の向上につながった。
- ② 系統性を意識した教師の授業力の向上が、児童の書く意欲、書く力を高めることにつながった。

### (2) 課題

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の定着とそれらを活用する力の育成
- ② 他教科や日常の書く活動に転移できる書く力の育成

### (3) 対応策

- ① 授業力向上の取組を継続・充実させるための授業力診断シートの活用

② 形成的評価を生かした漢字指導、漢字力や書く力につながる日記や家庭学習などの課題設定の工夫

③ 全教科等にわたる、伝え合う活動や書く活動の設定、指導の改善・充実

上記の校内研究の成果と課題、対応策は津覇小の教師同士の研究のまとめから抜粋したものである。

日々の授業の中で手応えを感じ、児童の確かな変容を認めながらも、課題は残っている。

課題の中でも漢字力等の言語事項は継続して取組む中で身につけなければならないものである。これを含めて書く力である。これらの力が他教科に転移していくための取組がこれから始まることだと思う。

## 7. 学び合い・高め合う授業の要件等

これまで、津覇小の日々の出来事や学校長の経営ビジョンや校内研究体制づくり、津覇小の活動の実際、アンケートの結果、諸調査の結果、校内研究成果と課題を振り返りなどを記してきた。その都度、私自身に見えてきたことを記載してきたが、教師同士の学び合い、高め合う授業づくりの要件や関係性について再度まとめていきたい。

(1) 子どもの課題、教師自身の課題を全教師が真摯に受け止め、実践につないでいく。

一人一人の教師が校内研究授業が何のためにあるのか、誰のためにあるのか、教師としての自分の課題は何か、自分の課題を解決するためにはどうすればよいのか。目の前の子どもにつけてやりたいことは何なのか等を真摯に受け止めて日々の実践に向かっている事実を見ることができた。前半に津覇小の「当たり前の事実」として記載してきた「教師全員で学ぶ教材研究の仕方」で私が驚いたことの裏には、上記のような教師の思いや考えがあったのである。

また、校内研修を終える度に研究主任から配布される「校内研究通信」は、自分達が行っている日々の活動を全教師で振り返り、学んだこ

とは何か、次の課題は何か等を示してくれる羅針盤のような大切な役目を果たしていたと思う。同時に日々行っている実践の手立ての有効性や児童の変容等の新鮮な情報をも直に伝えているので、互いの実践を共有し交換し合う場が自然に設定されたと考える。それが、学校全体で取り組む課題を明確にし、ベクトルを一つに向けて全教師で学び合い、高め合う授業づくりに繋がっていったと捉えている。

(2) 校内研修は「やらされる」ものではなく、教師が主体的、自律的に取り組み、協働で改善を図っていくものである。

津覇小の教師に共通していたことは、いつも謙虚な気持で子どもや同僚に学ぶ姿である。自分では分かっているつもりであっても、子どもや同僚に学ぶものは結構大きいものがある。教材研究の仕方など知っていると思っても、やればやるほど奥が深いことに気づくものである。多くの教師がそのことを踏まえて研修会に臨んでいた。教師自身の課題が明確になっているので、誰かに校内研究をやらされているという感じではなかった。

先述したように研究授業を終える度に、授業を参観する視点が鋭くなり、発言にも各自の実践と結び付けながら具体的なことを述べるようになっていった。このように教師一人一人が心を開き、自分の実践を気軽に公開しあえる関係性を築いていったことが大きな成果に結びついたのだと思う。

また、校内研究を「苦痛なもの」とせず、また、マナー化せず、「授業の本質」をしっかり捉えて自分達のための校内研究を行ったことに意義がある。

このように教師が意欲的に学び、子どもの思いや考えを受け止め、楽しい授業づくりに挑戦していったことは、子ども自身にそれが伝わり、子どもの変容に大きく繋がったと捉えている。教師が協働で授業改善を図っていく事実に出会って幸運だったと思う。

(3) 自らの実践に手応えを感じ、児童の変容に気付き始めると教育活動がレベルアップする。

みだしのことは、教師の手立ての「有効性のキーワード」や「子ども達の作品」等を考察する中でも既に述べてきたことである。津覇小の取組は、教材研究の中から生み出した「表現の型」のみに終わっていない。先述したように全校的な取組が増え、教育活動がレベルアップしている。そのことが系統的な指導に繋がり、全校児童の書く力を確実に向上させていった。それにつれて教師のモチベーションも上がり続けたのである。

教師の週案にも記載されていたように、手応えを感じているからこそ、意欲的に次の取組に挑戦しようと努力するし、教師自身も子どもと同様学び手の一人として成長することに喜びを見出していくのである。

最初から「あれもこれも計画にいれよう」とせず、まず、授業づくりの基本的なことから一步一步積み上げていったことが教育活動のレベルアップに繋がったと捉えている。

日々の実践の地道で小さな手応えの積み重ねが、やがて児童の大きな変容に繋がることを全教師で共有したことは大きいと思う。

(4) 児童も教師も日常的に学んだことや実践を振り返り、評価することで新たな方向性を生み出す。

先述したように、子ども達は、日常的に学んだことを振り返ったり、互いの作品を相互評価したりして教師や友達、周りの方々から学ぶことの大切さを身につけている。

自分の作文を他人に公開し評価してもらった習慣化をつけた子どもたちは、アドバイスを素直に受け入れ、伝え合う力をよりいっそう高めていくに違いない。そして新たな目標を掲げて書く力を付け、他教科にも転移させていくであろう。教師自身も子どもたちと同様、実践の振り返りを「校内研究通信」をはじめ週案、指導と評価の一体化などで日常的に行っている。

このように教師同士が実践を振り返り、評価し合っ

て設定されることは、とても貴重なことである。お互いに学び合い、高め合う授業づくりの大事な要件の一つだと捉えている。

(5) チーム型で進める校内研修

先日、なにげなく目を通した朝日新聞（2012年12月9日（日）朝刊）の「仕事力」の欄の「本気になりませんか？西水美恵子が語る仕事」の見出しが目をひいた。西水氏は、シンクタンク・ソフィアバンクパートナー、元世界銀行副総裁であり世界的に活躍なさっておられる方である。その方の記事の中に「人間の集団や組織にはグループ型とチーム型があり、本当に個人の力が出せるのはグループ型ではなくサッカーなどのようなチーム型だ」と述べておられる。

チーム型の場合は「チームは目的をしっかりと共有し、そのために一人一人がチームの価値観と自分の役割を認め合い、状況毎にリーダーを変えていく」「グループは、議論し結論を出しても実行を担当者に委ねるが、チームは、議論し結論を出したら自ら実行に移し力を合わせる」とあった。つまり、自分の役割を自分で切り開いて互いに周囲を高め合っていくのがチームのリーダーシップだということだった。

この記事の内容は納得することが多く、校内研究での管理職や研究主任のリーダーシップのとり方と重ねてみることにした。学校において教師同士の「学び合い高め合う関係性」を築くためには、グループ型よりもチーム型が望ましいような気がしている。それは、教師間が学び合い、高まりあっていくためには、津覇小のように互いに目的や課題を共有しあって、いつでも誰でもリーダーになりうる機会があることが大切であると考えからである。

先述したように津覇小において、校長、教頭、研究主任のリーダーシップの取り方や職員の関係性のあり方が「チーム型」と重なることが多いことを実感している。

このことは、教員を養成していく過程で大切にしなければならない重要な視点だと思っている。

学校長をした筆者の経験から述べてみる。例年、人事異動の時期になると校内研究を牽引す

るエースとなる教師を求めるのが管理職の常である。エースとなる教師が配置されると校内研究は上手くいくと思ってしまう。しかし、エースの教師が教師集団をぐいぐい引っ張っていくような校内研究体制では、多くの教師の主体性や自律性、そして協働性は育ちにくいと考えている。校内研究で一緒に話し合いに参加はしても、何かとエースの教師に頼ってしまい、一人一人の教師の力が発揮されにくいのではないだろうか。一人一人が実践の手応えを感じ、児童の変容を全員で共有する喜びの場が少なくなるような感じを持っている。

## 9. 津覇小で学んだことを大学で活かす

今回の共同研究を通して、筆者、そして学生が学校現場の教師から学んだことは大きかった。津覇小の校内研究授業で学んだことを講義の中で度々伝えるように心がけてきた。2012年11月19日(月)に行った講義で学生の学習メモに下記のような内容が書かれていた。

「今回の講義の中で、とても印象に残ったことは、津覇小の2年生の授業づくりである。教室をおもちゃ工場にみたと、子どもたちをその気にさせる取組がユニークだと思った。おもちゃ工場の社員としてお客に分かりやすくおもちゃの説明書を書くという設定が子どもにやる気を起こさせるといった。子どもたちは、おもちゃを買う人を意識してわかりやすく書く努力をしたと思う。今日は、教科書を教えるでなく教科書で教えることの意味がだんだん理解できるようになってきた。」

実践の具体例を通して学生は「教科書を教えるのではなく、教科書で教えること」の意味を理解しようとしている。

ここで津覇小の教材研究会に実際に参加したり、研究授業参観、授業研究会に参加したりした学生の声を紹介したい。

『教師は、学び続けるからこそ教えることができる』という言葉の重みを実際に学校現場の校内研修に参加して強く感じた。先生方は、頭をつきあわせながら真剣に教材研究に取り組んでいた。学ぶためには、素直な姿勢と謙虚さが

必要であることを改めて実感した。教師を目指す者としてそれを大切にしていきたいと思った。」

実際の学校現場の教師と関わる中で、教師としての姿勢や学び方を実感として受け止めている。また、机上で学んだことを学校現場に出向いて実践と結び付け、より理解を深めていこうと努力する姿勢も覗えた。

冒頭にアドバイザースタッフの趣旨を4点記載したが、今回の共同研究を通して、ひとつひとつの持つ文言の重みを実感した。

## 10. おわりに

筆者は、昨年まで38年間、学校現場に勤務し教師の授業力向上を大きな課題として取り組んできた。しかし、「教師同士の学び合い、高め合う授業づくりとは?」「学び合い、高め合う関係性」についての課題は抱えたままであった。

今回、津覇小と大学との連携という貴重な機会に恵まれ、授業づくりを通して津覇小の教師と共に大切なことを再発見した。ここでは、「連携を通して見えてきたこと」を津覇小の校長先生と大学側の立場(筆者)から記載する。

(1) 連携を通して見えてきたこと(津覇小の校長) 理論と実践を兼ね備えた琉球大学の先生の指導・助言を仰いだことにより、本校教諭が以下のように、自分たちの実践のあり方や教育観、子ども観を見つめ直すことができた。

- ① 教師の取り組み課題が明確になり、教職員の協働的關係が強化された。
- ② 年間を通し、一貫した指導・助言を仰いだことにより、深い教材理解、確かな指導法等の授業力の向上が図られた。
- ③ 琉球大学の先生の教材研究会における指導・助言の下、実践することにより、「手だて」と「児童の変容(伸び)」を実感することができ、主体的・自立的に授業改善に取り組む教師の姿がみられた。
- ④ 書くことに苦手意識を持っていた児童が「文章の書き方がわかるようになった」と感じており、自尊感情を育むことに繋がられた。

このように、児童と教師の潜在能力を引き出し、教育は共に育て合い、共に育ち合うものであるという学校風土づくりに大きく貢献した琉球大学の先生にこの場をかりて感謝を申し上げたい。

(2) 連携を通して見えてきたこと（大学側から）

この一年間、津覇小職員と学び合う仲間の一人に加えさせて頂くことにより、学んだことと今後の課題について記したい。

- ① 学校現場における「学び合い、高め合う教師の関係性」や「教師同士の学び合い、高め合う授業づくりの要件」を津覇小の職員と共に見つけ、再確認することができた。
- ② 津覇小の教師の授業づくりや日々の多様な取組、多くの貴重な資料等を頂き、それを日々の大学の講義で活かしたり、学校現場の実践に学生が参加したりすることにより、講義が充実した。学生も机上で学んだことと実践を結びつけながら理解を深めることができた。
- ③ 大学が地域の学校と向き合って連携を深めることは、大学の教員、学生が成長していく貴重な機会や場が与えられていることを実感した。より質の高い教員養成を目指していく上で重要なことだということを学んだ。
- ④ どの教師も授業力の向上を目指して日々、頑張っておられることを感じている。この一年間の津覇小での学びを無駄にすることなく、新たな課題として近隣校へ波及できるような取組を行っていきたい。

今回は、津覇小全教職員の全面的なご協力を得てこの実践研究を書き終えることができた。特に、喜納校長先生、我如古研究主任には、ご多忙にも関わらずこの実践研究の執筆にも関わって頂いた。心から感謝を申し上げたい。

このような貴重な機会と場を与えて下さった中城村教育委員会の安里教育長をはじめ喜納校長、津覇小の全職員、「とよむネット」関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

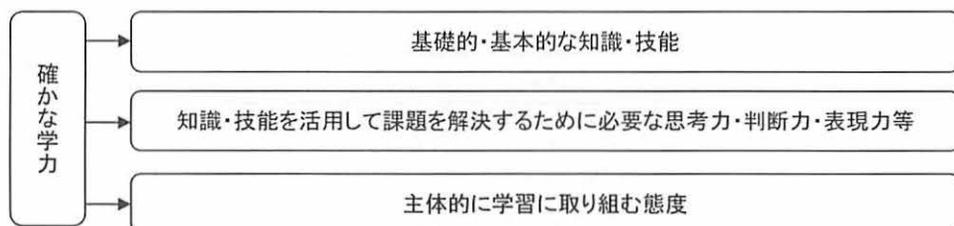
【参考文献・参考資料】

- 1) 佐古秀一他2名著：「学校づくりの組織論」学文社 2011年
- 2) 津覇小学校学校教育計画：2012年
- 3) 津覇小学校校内研究資料：2012年
- 4) 朝日新聞：2012年12月9日朝刊
- 5) 田中博之編著：「言葉の力を育てる活用活習～型を活用し個性的に表現する子どもたち」ミネルヴァ書房 2011年
- 6) 京都市教育委員会京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センター ブックレット HPより「授業力向上にむけて大切にしたい視点」

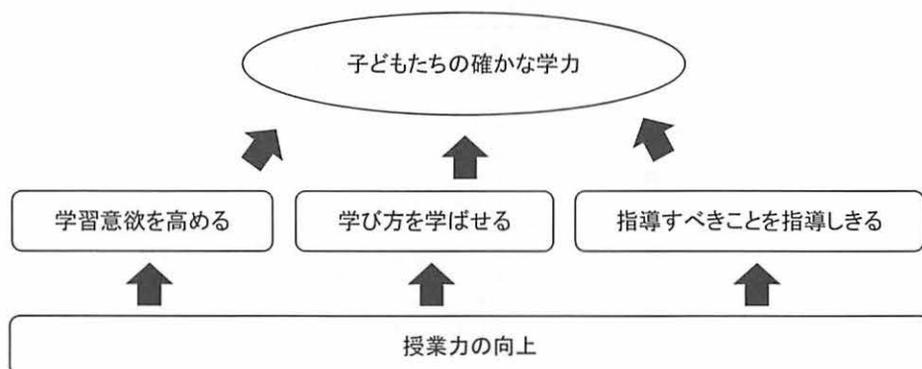
添付資料① 琉球大学との連携（地域教育資源の活用）による授業力向上をめざして

1 授業力とは

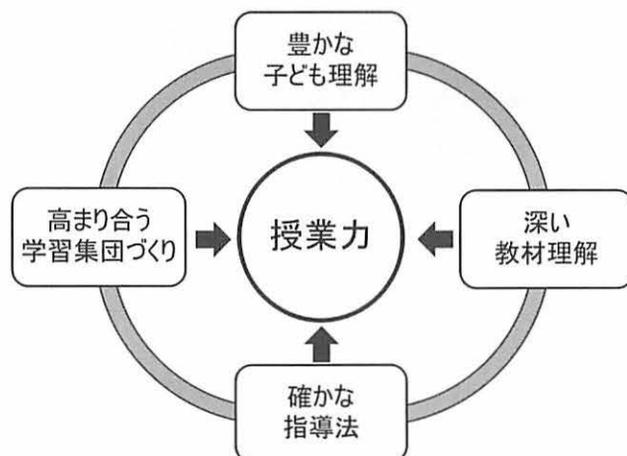
授業力 = 子どもたちの「確かな学力」を保障する力



授業力の向上のために求められるのは、単に一方的に教え込むのではなく、子どもたちの「学習への関心・意欲を高め」ながら、「学び方を学ばせ」「指導すべきことを指導しきる」こと。



2 授業力を高める4つの視点



### 3 国語科を中心にした授業力を高める4つの視点の内容



※ 京都市総合教育センター資料、玉城きみ子先生提供資料より

# 校内研通信 No.7

## 3学年授業研究会、お疲れ様でした

今年度第1回目の全体授業研究会が終わりました。今回は、単元目標が「感想を書く」ということでしたので、研究主題に迫る手だてとして「表現の型」を十分に活用できないこともあり、単元目標と校内研究をどうつなげるか難しい面があったように思います。しかしながら、子どもたちは感想をよく書いていました。研究実践を通して、子どもにも学びがあったという事実は素直にとらえていきたいと思えます。校内研修と結びつけるには「表現の型」の活用も必要ですが、それ以外の「表現力を高める手だて」の模索も必要だと感じました。

研究は公開検証授業一度で終わるものではありません。一年間の継続的な研究です。3学年は次の単元でも検証する必要がありますし、他の学年は公開授業以外の説明文単元での検証も必要だと思います。一年の研究で得た成果・課題を共有し、お互いに、そして子どもにも学びが得られればと思っています。

小野美先生、3学年の先生方、たいへんお疲れ様でした。他の先生方、運営面でのご協力ありがとうございました。

### 授業者 & 共同研究者の反省

#### 授業者の反省

##### ■ 児童の実態について

書くことが嫌いの子が学級の2/3もいた。理由として、「何を書いてよいのかわからない」と答えた子が多かったので、書かせる手だてを考えていった。

##### ■ 書かせる手だてについて

- 「ワークシートの工夫」をした。書かせるのは感想文であったが、説明文と同様に「はじめ・中・おわり」の文章構成で書けるように枠を設け、書き始めや書き方、使ってみたい言葉などを示した。
- 発問により、それぞれの観点で出たことについて言葉をふくらませ感想文に取り入れられるように考えた。

##### ■ 本時について

実際は、発問の難しさを感じた。書く観点「ウイルソンさんのすごさ」の発問「ウイルソンさんはどんな人？」に対し、子どもは直接的な意味をとらえていた。書く観点「ありが行列をつくるふしぎ」では、うまく発問できず、言葉を膨らませることができなかった。また、以前とは違う新しい考えが出て、確かめのつもりが広がりすぎてしまった。

#### 共同研究者より

##### ■ その後の指導について

- 書いた感想文をグループで交流させ、評価シートを使って振り返りをさせた。
- 評価シートについて

項目3の「自分やほかの動物と比べているか」については、人間の役に立つ「道具」とありの役に立つ「えき」を比べて書いている子がいた。また、項目4の「新しい言葉を使っているか」については、ウイルソンさんがすごいという表現を「熱心」と言い換えて表現している子がいた。

- 友達に評価してもらい、感想を書いてもらったあとの児童の感想には、「いいところを真似したい。」「友達に△をつけられて、それを直した。」など、友達のよさを見つけたり、自分の作文を推敲することにつながりやすくなることができた。

■ 「表現の型」の活用について

- 本単元では、説明文の読み取りの際に学習したもの（文章の組み立て、使ってみたい言葉、順序を表す言葉など）を表現の型にしてまとめた。次の説明文の読み取りで、本単元を振り返るときに活用したい。

**各学年のグループ協議記録**

① 授業仮説の検証

よさ	課題(疑問点)・質問
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 観点を与えることで感想が考えやすくなってよかった。</li> <li>○ 観点を全体で確認したので、使いたい言葉、新しい言葉を文の中に取り入れることができた。</li> <li>○ 観点について話し合う場で、多くの意見を出させることで、子どもの考えを広げることができていた。</li> <li>○ ワークシートの活用により、感想をすぐ（短時間で）書けていた。</li> <li>○ 文章の構成・観点、つなぎ言葉などがおさえられていたのよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 導入が長く、子ども同士の話し合う場が短かった。交流ができるようにしてほしい。</li> <li>● “話し合う場”とは、教師との話し合う場なのか？</li> <li>● ワークシートは、第一教材の「イルカのねむり方」の授業でも使っていたようなので、書き方はわかっている子が多いようであったが、実際にワークシートの株を児童が活用しているかどうかは、授業参観だけではわかりにくかった。</li> <li>● 子どもが言葉を増やせていなかったのではないか？</li> </ul>

② 子どもの姿（姿容）

よさ	課題(疑問点)・質問
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発表をする子は全員ではなかったが、他の子どもしっかりと友だちの発表を聞いていた。</li> <li>○ お互いに自分が何を書くのか話すことができていた。</li> <li>○ ワークシートの手だてがあったから、文章の苦手な子どもも書いていた。</li> <li>○ 自分や他の動物と比べている子、新しい言葉で表現している子どもも多かった。</li> <li>○ 自分が読んだことのある本と比べて書いている子どももいた。</li> <li>○ 観点に沿って作文が書けていた。</li> <li>○ わからないところは質問し、一生懸命書くことができていた。</li> <li>○ 自分の考えたことや思ったことを書けていた。</li> <li>○ 活発な意見が出る雰囲気ではなかったが、よく考えて授業に参加していることが書いている文章の内容でよくわかった。</li> <li>○ ふだん書けない児童が書けているというのはすばらしいと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 例文を使わず、困っている子がいた。ワークシートの例文の使い方は指導していたのか？それを使えば書けそうなのに困っていた。</li> <li>● 型を参考にしない子もいるので、いい子の例文を始めに板書して示すのはどうか。</li> <li>● 主述のしっかりした分ができていない子どももいるので、主述を押さえた上で新しい言葉を取り入れるとよいのでは？</li> <li>● 子どもが受け身の時間が多い気がした。同じ子がずっと発言していたように感じる。</li> <li>● 子ども同士のキャッチボールをさせてもよかった。</li> <li>● ワークシートの3つのまとまりの内容が全て同じような内容になっている児童がいた。</li> </ul>

### ③ 教師の手だて

よさ	課題(疑問点)・質問
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「使ってみたい単語」「文」などを示したことで、感想文が書きやすくなった。</li> <li>○ 「ありについて」「ウイルソンについて」の感想が選べるような形にしたのはよかった。書きやすいと思う。</li> <li>○ 指導案のアンケート結果の分析が細かく、児童の様子が伺える。</li> <li>○ 「むれ」という言葉を「スイミー」から出していること、2年での学習の方向性が見えてきた。</li> <li>○ 感想文を書く前に、「イルカのねむり方」の感想文を紹介し、表現の工夫を確認していたところがよかった。子どもの変容につながった。</li> <li>○ 子どもの考え、つぶやきをたくさん引き出すことができた。板書で残しているのがよかった。</li> <li>○ 机間指導で書けない子への助言を行っていた。書くことが止まっている子や書く内容が逸れている子への配慮がよかった。</li> <li>○ 「イルカのねむり方」の感想文の大きな見本があり、子どもたちはわかりやすかったように思う。</li> <li>○ 全文の拡大コピーで授業の後を残しているのがわかりやすかった。学年でも取り入れたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● それでも書き出すことができない子に対して、書き出しの文を書き加えたワークシートを工夫してもよかったのかな？</li> <li>● ペア学習の様子が見えなかった。どのような指導をしているのか教えてほしい。</li> <li>● ペアで意見交換の盛り上がりがあると嬉しいのでは。</li> <li>● 子どもの声が出ないとき、グループやペアで話し合った内容が全体の場に出てくるようにできれば…。</li> <li>● 理解の低い子には時間的に長かったように思う。始めに「イルカのねむり方」の作文例や他の児童の作文例を紹介して書く観点を確認してもよかったのでは？</li> <li>● 前時の振り返りはあった方がよい。</li> <li>● 導入を少し絞れてもよかった？</li> <li>● 話が広がりすぎたかな？「スイミー」や「イルカのねむり方」など。</li> <li>● 書く観点の「ありが行列を作るふしぎ」と「ウイルソンのすごさ」を行ったり来たりして、感想をまとめる順序にもあまり沿っていなかったように思えたので書きにくそうに感じた。</li> </ul>

### その他

- 「イルカのねむり方」を学習し始めたときからの子どもの変容を知りたい。
- 感想文を書くのにも当てはまるように、表現の型をうまく活用した授業をどうすればいいか。
- 校内研でつきたい力は「表現の型を使って感想を書く」なのか？「表現の型を使って説明文を書く」なのか？
- 指導案に時間配分があれば…。

## 指導助言（玉城きみ子先生）

### 授業研究の視点

- 授業研究の視点は「子どもありき」。大事なのは、目の前の子に即していること、目の前の子が楽しく書けること。「型」はあくまで手段。「型」に即してやるのが目的ではない。

### 津嘉小の校内研修のよさ

- ① 学校全体で子どもの実態をよく把握していること
- ② どんな手だてで子どもに力をつけたいかということを系統立てて考えていること
- ③ 子ども主体の取組にしていること
- ④ 多くの先生が積極的に“自分事”として授業に参加していること

### 「表現の型」のもとになる田中博之先生の著書の光る言葉

- 学習の補助輪として「型」を取り入れる
- 型は学力を保障し、表現は個性を保障する
- よい書き手、よい読み手を育てる

### 指導案について

- 実態が把握されている。
- 学校全体として、研究の筋道が立てられている。
- 校長の学校経営と研究主任の考えがつながっている。
- 型を取り入れた田中博之先生の教えを参考にしている先進的な取組である。

### 説明文の学習の目的

- ①「何が書かれているか」を読み取ること
- ②「どのように書かれているか（筆者の書きぶり）」を読み取ること

### 本時の授業について

#### ■ 良かった点

- 板書計画とは違う形で児童の思考を広げていった。子どもを大切にしている発問であった。
- 明確な活動の目的を達成させるためには小さい時から、ウイルソンのようにふしぎを追うことの大切さを教師が伝えることが大切（本時はしっかりと伝えていた）。
- 「命を守る行列」という児童の発言は、これまで教師が指導してきたことがうかがえる発言であった。

命のつながりを考えさせることができる

#### ■ 課題

- 児童の発言「命を守る行列」をもっと広げるべきであった。  
→ 「あなたすごいね！具体的にはどうすることだと思う？」と発問したら  
“エサを見つける” “仲間を呼ぶ” “おしりからえきを出す” “においを出す” …と広がる。
- 教材を通して、他の動物はどうか？と発展させていく。
- 教師が児童のつぶやきを生かし、ウイルソンさんの大切さを粘り強く出させたことから、その人となりを引き出された。しかし、一時間もありを観察した児童に、観察してどうだったかを聞いた方がもっと広がった。
- 内容を通してどんな力をつけていくのか。  
→ 「ものの見方・考え方を広げていく」「自分の生き方につなげていく」
- （実験や研究を繰り返した）ウイルソンのすごさは、教材文を辿っていきと出てくる。  
→ はじめに、次に、それから …
- ペア学習は考える活動のときに仕組む。

### きみ子先生の資料より

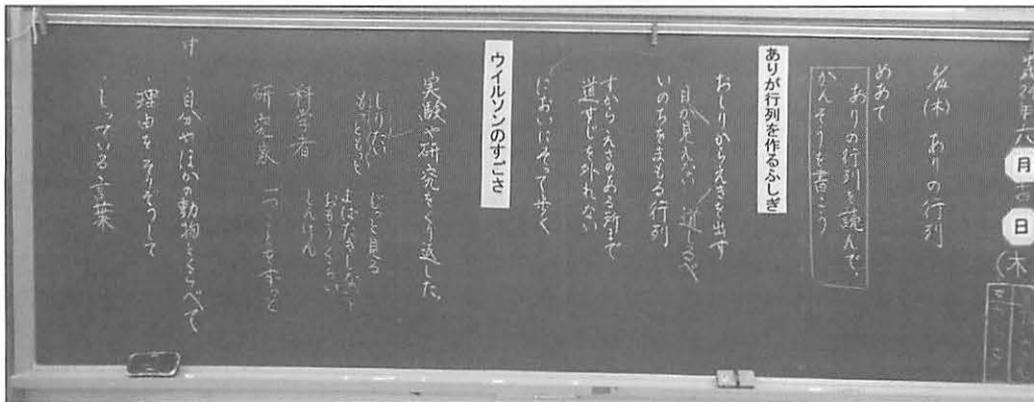
- 言語活動を取り入れた授業づくりを目指す場合、活動の目的を明確にし、それを達成させるための学習計画を立てることが大切(p1)。
- 説明文教材で「書く活動」を取り入れることで、わかりやすく伝え、納得させる力を育てる(p3)。
- 書くことの意欲を高めるために、感想を書くことで終わらせるのではなく、昆虫クイズ（資料：昆虫クイズ）などでもっと興味をもたせ、図鑑作りにつなげていく方法もある。
- ワークシートも段階的に工夫するといいい。それでも書けない子には個別指導を。
- 学び合い（交流の場）があることで、思考力・判断力・表現力が育成される。
- 「一人勉強の手引き」を津覇小の子の実態に合わせて変えながら使ってみては。

**指導計画全体の課題について**

- 児童の初発の感想に出てくる、子どもの疑問や出した課題から学習課題を決めて段落を読み取らせることが大切。
- 「(教師が)教えたいこと」と「(子どもが)学びたいこと」をつなげる。そのためには、子どもの問いを大事にする、問いを生かすこと。

**きみ子先生の雑記帳より**

- 「学ぶ」とは、「やり方がわかる」「答えがわかる」ことだけではなく、「今学んでいることの意味が子ども自身にわかること」「なるほど、こういうことかとつぎやきが出ること」。
- 子どもが主体的に学ぶために、子ども自身の「問い」がどれほど重要な意味を持っているか。「問い」がないところに追求はない。



## 添付資料③

## 2012年度 大学が津覇小学校との校内研究で連携した主な取組

日時	対象者	主な内容	場所
4月の春休み	校長先生、前研究主任、現研究主任、3年の学年代表授業者	2012年度の学校経営ビジョンと校内研究のテーマ、研究の概要 校内研究体制等について、校長や研究主任から詳しく説明を受けた。その後、一年間の研究の進め方について話し合いを行った	琉球大学玉城研究室
4月13日 16:00～17:30	校長、研究主任 3学年のメンバー 他学年の教師 20名程度	3学年上:「ありの行列」光村図書 ①授業改善と教材解釈の意義について ②指導書や赤本を見ずに教師自身の力で教材解釈をしていく方法の説明とワークショップを行う。	津覇小 3学年の教室
6月5日 16:00～17:00	3学年担任 研究主任 4名	①校内研究授業全体会(中学年)にむけて指導案の検討を行う。 ②「イルカのねむり方」の授業実践から「ありの行列」にどう繋げていくか。 ③読むことから書くことへ繋げていくための教師の手立てについて:型の活用について	津覇小 3学年の教室
6月14日 13:55～16:45	全教職員対象	校内研 全体究授業研究会(中学年)の指導助言 ①第3学年 光村図書3上「ありの行列」の授業参観 ②研究授業についての指導助言 ③校内研究の進め方についての感想等	津覇小 3学年の教室
8月29日 14:00～18:00	6学年担任、 研究主任 4名	①校内研究授業全体会(高学年)の教材研究会 教材名 「鳥獣戯画を読む」 教材解釈を中心に行う。伝統的言語文化に関わる新しい教材の読み取り、読みをどのように書くへ繋げるか ② 教科関連学習について	琉球大学 教材分析室
10月9日 15:30～16:45	4学年担任 研究主任 4名	① 校内研究隣学年研究会にむけて教材研究会 「アップとルーズで伝えよう」を読む教材解釈 ② 「仕事リーフレット」を作成していくための方法 説明文で学んだことを書く力へ結びつける手立て	津覇小 4学年の教室
10月25日 13:55～16:45	6学年担任 研究主任 校長、教頭 他教数名	①校内研究授業に向けての一人学びの授業づくりを参観 第6学年「鳥獣戯画を読む」 ②一人学びの仕方から学び合いの授業に繋げるための手立て等について	津覇小 6学年の教室 校長室
11月2日 13:55～16:45	全教職員対象	校内研 全体授業研究会(高学年)の指導助言 ①第6学年 光村図書6年「鳥獣戯画を読む」 ③研究授業についての指導助言 ③講話:「言語活動の充実」について	津覇小 6学年の教室
11月6日 15:30～16:45	2学年担任 研究主任 4名	①校内研究授業全体会(低学年)にむけての教材研究 教材名「しかけカードの作り方」「おもちゃの作り方」 光村図書2下の教材解釈 ②他教科との関連における書く活動の取組について	津覇小分 校2学年 の教室
11月16日 13:55～16:45	全教職員対象	校内研 全体授業研究会(低学年)の指導助言 ①第2学年 光村図書2下「おもちゃの作り方」の授業参観 ②全体協議会での指導助言 ③講話:「教材研究の仕方(一人学び、書き込み、課題の焦点化)」について	津覇小分 校2学年 の教室
その他に 数回	校長、教頭、研究主任、教諭	①授業づくりについて ②学力向上対策の取組について等	校長室 玉城研究室